

# さとやま

No.122

2013年春号

特定非営利活動法人うしく里山の会広報誌



## 目次

- 1. 表紙
- 2. 創立10周年にあたって  
雑木林応援隊・畑隊とは
- 3. 里山自然観察隊  
「樹木リサーチ」の推進計画
- 4. 「牛久の里山樹木ハンドブック」の紹介
- 5. チーム街路樹20新年度を迎えて  
宮崎県綾町から樹名板がやってきた
- 6. 自然観察活動の目指すもの
- 7.刈払機・チェーンソー講習会  
親子農業体験講座
- 8. 観察の森復興、そして25周年へ  
牛久市観光アヤマ園管理業務受託
- 9. 身近な樹木 No.25 フジ  
スプリングエフェメラル
- 10. 初夏の里山風景  
お知らせ

スプリングエフェメラル  
Spring ephemeral

# うしく里山の会創立10周年記念特集



## 創立十周年にあたって

代表理事 坂 弘毅

2003年4月5日

うしく里山の会誕生

2004年4月29日

NPO法人人格取得

うしく里山の会が創立から十周年を迎えました。2003年11月、牛久自然観察の森を中心に市内に点在する里山を保全しようと、有志が結束し、任意団体「うしく里山の会」がスタートしました。その翌年10月、NPOの法人格を取得、本格的な環境保全活動が開始されました。設立趣旨は、牛久ならびにその周辺地域を主な対象として、「自然と人が調和した美しい環境を保全し未来に引き継ぐ」というものです。

燃えるような思いを持った有志が集まって設立した「うしく里山の会」は素晴らしい友に恵まれ、これまでに多くの実績を残して参りました。

大事業としては牛久自然観察の森の第一期指定管理者となり、第二期も認定され現在に至っております。受託事業はこれ以外にも、牛久市観光アヤマ園管理、独立行政法人森林総合研究所、牛久市から巨木リサーチ、街路樹樹名板管理などの他、自主事業も市民と協働で各種事業が拡大しております。

今年には十周年という節目の年、これまでの十年を振り返り、事業を分析し反省し、次の十年に向けて新たなスタートを切らなければなりません。

会員の皆様には更なるご支援を賜りますようお願いいたします。

## 雑木林応援隊・畑隊とは

プロジェクト責任者 雨宮 廣之

里山の会の会報が心機一転で季刊となるため、今までの活動報告のまとめとして、我が雑木林応援隊・畑隊を再紹介します。

ご存じの通り、牛久の自然観察の森は、里山的な保存方法を採用しているゾーンがあります。我々は主にこのゾーンの一部分と園外の荒廃林・竹林の2カ所を活動の場としています。この2カ所に共通しているのは、昭和30年代頃までは、共有のヤマとして利用されてきたものが、生活習慣の変化等により徐々に利用されなくなり、放置された林が、片や観察の森として管理残され、片や放置されたままとなったと言えます。以前、森林総研より講師をお願いして講演会を催しましたが、放置林の利用方法については、そのまま原生林にするのも一つの方法との事でした。でも、それでは面白く



新緑がまぶしいムジナの里

ありません。今では当たり前のように、どこにもあるのが、繁茂した竹林と雑木林で、ゴミ捨て場のようになっている箇所もあります。天狗巢病に侵された入る事も出来ない竹林、ゴミの捨てられた雑木林、これを出来れば開けて明るい元の姿にしたい・・・この思いが里山の会

の原点だと思えます。もしも昔のように薪炭材が必要になったら、化学肥料で無く、落ち葉堆肥が必要になったら、竹材が建築に、枝が箒のようにきれいになるでしょう。でも、昔に戻れることは出来ませんので、何らかの利用方法を見つければ有りません。そこで我々は、定期的に間伐し、間伐材で炭焼きとホダギを作り、景観保護と在来作物の継承で畑を作っています。生活のためや商売では無いので、プロには成れませんが、楽しみながら技術も覚えて、伝えていきます。雑木林をきれいにし四つ目垣を作ったら、ゴミを捨てられることが少なくなり、たまたま開けた雑木林のナラの木を近隣農家の方が伐採して、利用する事もありました。陽が当たるようになった林では、希少植物が復活することもあります。なかなか答えは見つかりませんが、雑木林、里山の楽しみ方、利用の方法を見つけたと思っております。一昨年の大震災、今後も予想される天災で、一気に昔のヤマの利用方法が蘇るかもしれませんが、楽しく利用する方が良いでしょう。雑木林応援隊・畑隊は、そんな目で、楽しんで健康になれ、お金を掛けずに、少し社会貢献が出来る・・・そんな活動です。

の大震災、今後も予想される天災で、一気に昔のヤマの利用方法が蘇るかもしれませんが、楽しく利用する方が良いでしょう。雑木林応援隊・畑隊は、そんな目で、楽しんで健康になれ、お金を掛けずに、少し社会貢献が出来る・・・そんな活動です。

# 里山自然観察隊

プロジェクト責任者 平塚雄

## 最後の活動モニタリング1000 里地調査を実施

去る3月9日(土)、観察隊プロジェクトとしての最後の活動であるモニタリング1000里地調査(植物相)を実施しました。当日は風もなく快晴で4月の陽気。定刻の午前8時30分、常連の4名が集まり、所定のコースで調査を開始。コース沿いの竹林では1月の大雪で割れたり曲がったりした多くの竹が未だ無残な姿を曝していましたが、時は春、草木の芽生えが勢いを増し、日当りの良い斜面などではオオイヌフグリ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウなどが群生。ウグイスの鳴き声、コゲラが木を突く音も聞こえる中、今回は寒さや風、雪などの障害もなく順調に調査を進められ、途中10分程度の休憩を入れ、約4時間の活動を無事終了することができました。枯れた状態で実(種)を付けているものを含めると14区分の地域で延べ約300種の草本種を確認、記録しました。

平成22年4月から3年間続けてきたモニタリング1000里地調査も今回が最後。この調査は正式な登録はしていませんが環境省生物多様性センターの調査基準に従っての植物相調査で市内城中町内に約3kmのコースを設定し毎月欠かさず実施してきました。

この間、月次の調査で登場する主役が次々と代わることから四季の変化を感じたり、冬でも青々しているシダ植物が多い事、真冬でもタンポポの花が見られたり、意



急傾斜地に生育するシュンランの蕾

識しなければ気づくこともなかったツメクサ等の小さな草々、それでも花を咲かせ実をつける事実を見ました。土地開発薬剤散布等人間の営みの自然環境に与えるインパクトの大きさも実感。又、外来種の多さ、繁殖力の強さもセイタカアワダチソウ、ヒレタゴボウ等の群生状態を見て実感しました。

一方、身近な植物の名前や生態、特性を知ることが野草・雑草等への親しみが増し活動が楽しくなり、生き物が皆んな一生懸命に生きようとしていることに気づき感動したことも。それがこれまで続けられたエネルギー源でしょうか。

観察隊は平成25年3月をもって活動を終了しますが、振り返ってみますと、観察隊は平成15年、うしく里山の会発足と同時に「里山歩き」プロジェクトとしてスタートし、平成15年度から同17年度の

3年間は毎月1回市内各地域を逐次歩き観察した植物、野鳥を記録しました。平成18年度以降は「里山自然観察隊」に名称を変更、自然観察会や自然環境調査を通じて地域の身近な自然に親しみ、貴重な動物植物の所在を明らかにすることを目的に活動を続けてきました。平成18年度から同23年度の6年間は一般市民の参加を募っての植物観察会(年4回開催)と観察隊メンバー主体での身近な自然環境の調査(主として植物、年4~5回開催)を活動の2本柱として行ってきました。10年間の長い間のご支援、ご協力ありがとうございました。

尚、うしく里山の会としてはこの種植物観察会活動は今後出前講座プロジェクトで行われる予定です。樹木に関する観察会については巨木リサーチプロジェクトで「樹木探訪会」等として行われていきます。

## 牛久市協働巨木リサーチ後継事業 「樹木リサーチ」の推進計画

プロジェクト責任者 渡辺 泰



「南裏市民の森」の看板と事前調査 12.11.30

進課所管の「市民の森」や「親水公園」を対象とし、これらの場所に生育している植物、とくに樹木の種類とその構成を明らかにし、調査結果をパンフレット等に取りまとめ、市民への広報に努めることにします。そして、これまでの事業の一部であった「市民の木」を中心とした「生育環境管理活動」および「広報うしく紙上での『牛久の巨樹』の広報活動」を引き続き進める計画です。

さらに、NPO法人うしく里山の会10周年を記念して平成25年3月に発行した、『牛久の里山樹木ハンドブック』を活用し、参加者が当該活動を通して、身近な樹木の名前を知ることができるような活動を併せて展開することになっています。

事業期間は平成25年4月から同28年3月までの3年間です。調査場所は平成25年度は「南裏市民の森」、同26年度は

「籠田市民の森」、同27年度は「上池親水公園」を予定しております。調査項目は、全域の樹種名、それらの幹周、写真撮影等です。平成27年度は湿性植物を含めます。

里山を身近に知るためには、里山の景観を構成している主要な要素である樹木の名前を知ることが第一と考えています。人の場合と全く同様です。新しい試みとして参加者が樹木名を覚えるための観察活動を調査活動と並行して実施することになりました。調査木にじかに触れて、認識を深めると共に、四季を通して自生木の生育環境別に現地へ行き、観察活動を行う計画です。

### 牛久の里山樹木「ゴズイ」の紹介

羽賀 正雄

本書（以下HB）については、会報1月号（119）「巨木リサーチ事業報告」において、渡辺泰代表から、編集の経過、樹種選定の基準、記載事項の内容、紙面の構成そして類書とは異なった特徴について記載されています。ここでは、その続編として、HB利用のポイントを紹介いたします。

下図をご覧ください。黄色地に赤色の樹種名「ゴズイ」が目に入ります。キャッチフレーズ「熟した・」は、樹種の特徴を一言で表現しています。樹種名の下には、科名・属名及びその学名（属名/種小名）が記載され、別名が併記されています（例：ミタジイノイタジイ、シイ）。また、近年における分子系統学（DNA

解析の応用）の成果を反映した新科名を参考として（）書きしています（例：スギ（ヒノキ）科、スギ科はヒノキ科に編入）。青地には、生活型、生育地（市内）、開花期（市内）、国内の分布といった基本的事項が要約されています。現地での観察においては、現物「樹木」と写真と解説文とを繰返し照合する必要があります。解説文は、3区分されています。県内・市内の分布状況、樹皮・

葉・花序・果実等の特徴、名前の由来等です。写真との関連は、左側の樹木全体、は右上段の花と下段の果実に対応しており、文中に該当する写真の番号を（）で示しています。写真の下には、説明と撮影場所・期日が記載されています。ゴズイの花には「城中、斜面林、11・6・1」とあり、6月頃牛久沼近くの斜面林で花を観察できることが分かります。秋9月頃であれば、果実の写真と

照合すれば同定できるでしょう。さらに、本文に付随する資料も参考にあります。冒頭にある「牛久市における木本植物の生育環境」は、その環境を斜面林、河畔林、社寺林など8区分し土地利用の変遷に触れながら、木本植物の現状について解説されています。ゴズイの生育地、斜面林・林縁については、本稿の斜面林を読むことによって理解を深めることができます。樹種名とともにそ



1. 結実期の樹形 観察の森 12.9.13



2. 花序 城中 斜面林 11.6.1



3. 果実 同左 12.9.13

## ゴズイ 熟した実は自然の妙

ミツバウツギ科ゴズイ属 *Euscaphis japonica*

- 1. 生活型：落葉広葉樹の小高木（高さ3～6m）
- 2. 牛久の生育地：斜面林・林縁など
- 3. 開花期：5～6月
- 4. 国内の分布：本州（茨城・富山県以西）～琉球

県内の分布は北部に少なく、南部には普通に自生します。市内では斜面林や林縁に広く生育しています（1）。樹皮は黒緑色で、灰褐色の皮目が縦に不規則な割れ目が入ります。葉は対生し奇数羽状複葉、長さ10～30cm、5～9枚の小葉をつけます。花序は長さ15～20cmの円錐状、直径3～4mmの黄白色の花を多数つけます（2）。果実は肉質の袋果で、赤色に熟すと反り返って裂開し、黒色の種子1～3個が現れます（3）。名前の由来について諸説ありますが、魚のゴズイのように役立つからともいわれています。

[本文の事例] 38頁「ゴズイ」樹種名、写真、解説文が見易く配置

の樹種が生育している環境を知ることが重要である。

巻末の「牛久市内の自生木本植物名」は、市内で見られる木本167種(うち90種掲載)について科別分類と自生、移入、外来、栽培逸出等の区分を示しています。身近な樹木が市内に自生しているのか、他所から持ち込まれたものかを知ることも大切です。「植物用語」は、解説文に用いられている用語についての説明です。ゴズイでは皮目、円錐花序、袋果等を確認できます。

HBは「市内に自生する身近な樹木」について、見易く、分かり易く、美しい、かつハンディーな樹木図鑑があつたらとの思いから編集されています。編集メンバー自らが持ち歩きたい図鑑であればこそ、皆さんや市民の方々に使用していただけるを考えます。野山が躍動する春です。HBをポケットに散策されてください。

### 千ム街路樹20 新年度を迎えて

プロジェクト責任者 増田 勝彦

市の委託事業として発足して5年目を迎えました。牛久市内を歩くと目にとまる街路樹・公園樹の名札、すなわち樹名板をつけています。この4年間で、取付けた数は約700枚に達しました。発足翌年からは、秋の紅葉を楽しむための落葉かきを市と連携して始め、現在は、二つの活動が柱になっています。

活動は、市民を対象としたボランティアで一貫しています。樹木につけた後は二か月に一回、樹名板が割れ・カビで痛ん

でいなか、いたずらされて無くなっていないか等を4名1組の車で巡回、この管理を4年余り続けてきました。樹名板を管理する記録用紙をチェックシートと呼んで、エクセル表で数量管理をしています。巡回後に各班長は数量をチェックして、総括リーダーにメールで送ることになります。契約期間は年6か月、しかし、チームでは通年を自主的に管理しています。

秋十月になると葉っぱが紅葉に染まり、落ちた枯葉が舗道を覆います。この時期はサポーターと称する自主参加の市民も加わり、メンパーと一体となって落ち葉かきをします。ロマン活動と呼んでおり、市民への奉仕活動の一環です。趣味の対象とも言えない「樹名板の取り付け」と「落葉かき」に、手弁当で参加している心の支えは、樹木保護の意識に加えて、



ロマン活動 朝の落ち葉かき後の爽やかな顔 2012/12/5

不特定多数の市民に貢献する地域活動に共鳴しているからだと考えています。

昨年、樹名板の製作依頼先を、千葉市から宮崎県綾町のボランティア団体「綾夢楽人の会」に、メンパーの紹介により変更しました。綾町は紅葉樹林に囲まれていて、国連のユネスコエコパーク(生物圏保存地域)に、屋久島、大台ヶ原、大峰山、志賀高原、白山に続いて、30年振り指定された町です。昨年11月に受け取ったヒノキの樹名板は、寒暖の厳しい山林で育ったせい、従来品よりも芯が紅く、板面も締まっています、日の光に反射して重厚な輝きを放っています。

メンパー間の交流と親睦を図るために、「わくわく旅Box」と「懇親クラブ」があります。「旅Box」は、牛久を離れて樹木に関わりのある地域に出かけ、街路景観と、樹木(植物)観察、並びに歴史等を吸収します。発足以来の研修見学地は、一泊を含めて、23箇所にもなりました。去年からは、健康維持のためのウォーキングも採り入れて、つくば市内の街路、公園を、花と紅葉を楽しみながら歩いています。

春のお花見会、冬の忘年会と、「懇親チーム」の活動もメンパーの活動を支えるモチベーションの向上に一役買っています。今年度も市の委託事業を着実に履行しながら、19名のメンパーの余暇の向上を見すえたNPO活動を進めます。

### 宮崎県綾町から樹名板がやってきた

チーム街路樹20 内田智子

牛久市内の街路樹に「樹名板」が付いているのにお気づきですか？



綾町からやってきたサワグルミの樹名板

私たち「チーム街路樹20」は、4年前から通算700枚の樹名板(木製)を街路樹に取り付けている。昨年、より耐久性のある樹名板を求めて、発注先を宮崎県綾町の「綾夢楽人(あやむらびと)の会」に変更し100枚を依頼した。綾町は宮崎県中央部に位置する人口7千人あまりの町で、2012年7月、綾地域がユネスコエコパークに登録された。森林率80%の小さな町が、なぜ世界から認められたのか?その大きな理由は、「日本の照葉樹自然林が最大規模で残されていること」である。もう一つは、半世紀以上にわたる「自然と人間の共存に配慮した町づくり」である。その柱が有機農業で安心・安全な農作物の生産により、自然環境へのダメージを最小限に、経済的な自立を実現している。このような取り組みが、「生態系の保全と持続可能な利活用の調和」というユネスコエコパークの理念に合致したことによる。

「綾夢楽人の会」は、「綾が大好き」をキーワードに、国内外を問わず誰かがネット登録できる。「夢のようなことがしたい/楽しい場所にしたい」など思ったことを言葉にすると、それを受けて新たな発想が生まれる。多くの人や小さなことが重なり合って、化学変化が生じ、

“何が起るかわからない！” そんなことが現実になっていく空間である。樹名板は、このような夢楽人によってつくられた。

綾の森から木を伐ったのは、祖父と父親の跡を継いで林業を営む黒木さん。2歳のころから、祖父について山に入ったという木のエキスパートである。「牛久の樹名板は樹齢約60年のヒノキです。森の木は育つ場所や光の当たり方によって生長の早さや様子が全然違う。樹名板に合う大きさの中からよく締まった（年輪の多い）木を選びました」と黒木さん。「伐った所からトラックまでの約100mは担いで運んだよ」とこともなげに言う。樹皮は水圧を利用すると傷つかずに剥がれる。綾から来た樹名板の中心は赤みを帯びてきれいだ。樹齢30〜40年以上たつと中心部が“生き残るために”腐らないように自らタンニンや色素などを生成し、それが凝縮したところが赤色に見えるのだそうだ。

黒木さんが運んだ木を裁断し、磨き、塗装を施したのは「児玉工芸」を営む木作家の児玉さん。原木仕入から加工まで行い、扱った材料はカヤ、ケヤキなど50種類以上。その作品は木を裁断後、最低5年以上、ふた物は10年、茶筒は20年置いたもので作られる。「自然乾燥の間、夏は60位になるが、寒暖の差が大きいほうが、木の癖が出て割れなくなる」と言う。今回は納期が短かったので、少々木の癖に対応できる液性塗装によっている。塗料が均一にかかるスプレー吹きつけ、表裏の両面塗装、下塗り・上塗りともに2種混合液を使用等 手間暇をいとわぬ丁寧な仕事振り。「自然界にみられるデザイン性を尊重して、それに心を



児玉工芸 乾燥棚での樹名板乾燥工程

添わせて木を扱っていききたい」と児玉さん。

児玉さんが磨いた樹名板に文字を書いたのは、「玄大染織工房」を営む「綾の素材で草木染と糸を織る」染織家の玄太さん。樹名は「ゴシック体」で依頼したが、玄太さんがほんらい書く「文字」は絵のようで人をわくわくさせる。乾燥期間を少しでも長くするため文字入れ期間が削られ「夜な夜な樹名を書いたよ」と笑いながら言う。私たちの活動が「眠っている“木”（人から忘れられている“木”）に光を当てる」ことだとしたら、玄太さんは「眠っている“気”（人の何かしたい“気” 持ち）に光を当てる」天才である。どちらの“キ”も光が当たると花が咲き、実がなる。「工房に訪れる人との時間を大事にしたい」という。工房は365日開いていて、玄太さんの温かい人柄が多くの人を惹きつけている。

時を超えて、命の循環が行われてきた照葉樹林地帯から来た“樹名板”が綾と牛久をつないだ。このつながりが、今後どのように紡がれるのか？ 私たち人間がどのように自然と共生していくのか？

1枚の“樹名板”が放つ生命力と温もりからいろいろな思いが広がる。

### 自然観察活動の目指すもの

自然観察出前講座 石神良三

自然事業として誕生した自然観察出前講座も、今年度で8年目を迎える。過去7年間を振り返ってみると、実施125回、参加者数は延べ8,105人を数えることができました。

また、出前講座への参加者・内容・場所などについては、グループや団体等からの要請に応ずる方向で調整し、実施してきました。感想の一端をとりあげてみたいと思います。

- ・要請団体としてその大半を占めるのは、幼稚園、保育園、小学校であり、保育プログラムや学習プログラムに即した体験型の自然観察が中心。当然時間的にも制約があり1時間前後が多い。参加する幼児・児童に共通することは、全体で自然を感じ喜々として活動する姿です。
- ・東日本大震災に伴う放射線量の影響は、観察場所や方法上大きな課題となっています。観察場所の線量測定により、要請側の不安に配慮した対応を進めているところです。現在のところ要請の取りやめなどはありません。
- ・各地区の自然会活動である子育てサロンやふれあいサロンの要請もありますが、



保育園の幼児たちと

更に連携を深めていきたいと思えます。思いつくままに振り返ってみました。これからの活動にいかしていきたいと考えています。

さて、今年度の活動を進める上で特に配慮したい点は次の通りです。

- ・安心で安全な自然活動ができるように、放射線量の事前把握によるプログラムの提案と実施
- ・市民誰もが参加できるように、これまでの要請講座に加えて自然講座を年数回実施。総合的な自然観察（植生・歴史・くらし・文化）の楽しめる企画を検討中です。
- ・野外活動が困難な場合の屋内代替プログラム提案と実施

最後に、自然観察の大切なわけについて再確認をおきたいと思えます。自然観察会は、自然を保護する教育の一環としての役割を担っています。そのため

に自然に親しむこと、自然を知ること、自然を守ることが観察の要素になります。特に自然に親しむためには、全身と五感で自然に触れ、美への感動、発見の喜び、自然のしくみへの驚きなどの感動体験が大切になります。そして、自然観察を楽しむ人を一人でもふやすことが、自然保護を進めることにもつながっていきます。身近な自然を対象に、自然観察会を継続することは、とても重要な意味をもっているのです。

### 刈払機・チェーンソー安全衛生講習会

講習責任者 佐藤 輝雄

うしく里山の会主催で刈払機・チェーンソーの講習会が3月に開催されました。労働安全衛生法第59条に、「事業者は、労働者を雇い入れたときは安全又は衛生のための教育を行わなければならない」と定められています。本来であれば事業主がこの教育を実施するわけですが、事業主に代わって外部機関が実施することもできます。

個人として、あるいは雇用関係にないボランティア等で作業を行う場合は、この法律は適用されませんが、安全作業を考えた場合は受講されるべき講習と考えます。従ってボランティア等の主催者が「安全講習を受講している人に限る」とは、この安全作業を徹底する必要があるからです。

私も刈払機やチェーンソーを使用している農家の人に講習の話をすると、「俺達はあなたたちよりうまく使っているよ」



杉林で実技講習・受講者の目つきは真剣そのもの

等の返事が戻ってきます。確かに技能面では本当にベテランですが安全面では見られない場面があります。農家の主人が刈払機で草を刈っているすぐ後ろで奥さんが刈った草を鎌で集めている。主人が振り向いた瞬間に奥さんの頭に刈払機が当たって大怪我をさせてしまった（実際の事故例です）また、チェーンソーによる事故も多発しています。うしく里山の会では里山の保全などの立場から、刈払機やチェーンソーを使用する機会の多い人たちに、一人でも多く安全作業を行ってもらうためにもこの講習会を計画しました。

うしく里山の会での講習会は23年度からそれぞれ3回行われ、今回で延べ71名の方が受講されました。講師は会員のI氏・M氏、私の3名が担当しています。今年3月12日に刈払機、3月28・29

日にチェーンソーの講習会を実施し、刈払機の講習会には女性の方も参加されました。

講習会はテキストによる安全教育をメインで行い、機械の操作は基本操作となり実際には自分で経験を積んでの技能習得になります。

初めて機械を操作する方もいて、最初は恐る恐る機械の操作に入りますが、基本を覚えればなんとか除草ができるようになり面白くなってきます。

また、チェーンソーの講習ではテキストによる講習が1日、実技が1日となり、チェーンソーを実際にバラして構造を覚えることや、ソーチェーンの目立ての実習も行います。

2日目は実際にチェーンソーを使用しての伐倒作業に入ります。チェーンソーを使いこなしている方やはじめの方でもいて、いろいろ皆さんで教えあったりしている人もいます。特に掛かり木になった場合の処理方法では、高度な技術が要求される場合があります。ベテラン講師のIさんの出番が多くなります。

今後、3月・9月の年2回を計画して、うしく里山の会の講習会が定着していければと願うばかりです。

### 親子農業体験講座

プロジェクト責任者 飯田 雅俊

今年も始まるよ、と言っても畑を覆っているハリギリの小枝、昨年イモガラが散乱し寒さはまだドカッ居座っている、少し前に梅や桜が咲いたと聞いたが、ここ数日は曇り小雨、啓蟄と言っても虫



ジャガイモの植え付け

が動いている気配は感じられない、林縁にはソバを干すための竹の柵が役目を果たしたのち子供たちのベンチとなりこわれた平均台ように置かれている。畑も冬の間はひと休み。

昨年は参加人数を限定したことにより、作業に余裕ができ今までにない作物にも挑戦することができた。種から植え付けて元気に育ったなと思ったら間引きを忘れたため指の大きさがなかつたゴボウ、苗で植えた落花生はしっかり育ってくれて、塩ゆでして食べたときは美味しく初めての方は驚き大成功であった、スイカをうまく作れたと聞いたことはない、私たちのように2週間に1度しか畑に行かないようでは、カラスに食べられてはと周りにテグスを張ったがカラスも見向きもしなかつたという結果であった、食べただけが楽しみではないと、出来は小さ

かったが竹棒を持ち順番に目隠し畑でスイカ割りをおこなった。こんなことを思っている子供たちの声が聞こえてくるようだ、リヤカーに乗りたくせがむ子、虫籠に団子虫、ミミズをたくさん集めて得意げに見せてくれる子、暑い中雑草を片づけてくれた子。

さて、寒いと言っても日差しからはしっかりと春の明るさを感じられる、ジャガイモから蕎麦までの作物を作りながら皆さんと相談しながら進めていきたい。

3、4カ月しか会わなかった子たちがどんなになって現れるのか、新しい家族と会つのも楽しみ、畑にぎやかさが戻ってくるのももうすぐです。冬の間休んでいた畑に作物をたくさん育ててくれることを願って。

### 観察の森復興 そして25周年へ

牛久自然観察の森チーフコーディネータ

斉藤 孝

牛久自然観察の森は平成2年（1990年）の開園から数えて24回目の春を迎えました。

昨年度の来園者数は約3万人、本会が指定管理者に初指定された平成18年度以降では最少となりましたが、月間の来園者数で見ると、今春は震災以前の水準に戻りつつあります。

この回復傾向は、一昨年の夏以降、本格的な除染・線量調査に取り組みと同時に、拠点施設ネイチャーセンターの大規模な展示改修に踏み切ったことが功を奏

## 観察の森復興、そして25周年へ



牛久自然観察の森の四季

したものと思います。  
来年度、開園から四半世紀という歴史的な通過点を迎えるにあたり、いま一度原点回帰し、あらためて施設の目標を見つめ直し、私たち指定管理者のミッションを確認したい所です。

昭和62年（1987年）3月にまとめられた「牛久自然観察の森基本計画報告書」には、「木もれ日の中で心を豊かにし、自然に親しみ、草木に触れ、そして観察できる場所と時を提供する事は、将来に渡り計り知れない意義と効果をもたらすと確信する次第であります」との記述各自のものあり、事業開始にあたり大変な期待が込められていた事が伝わってきます。約3年間の工事期間を経て開園し、以来23年間、のべ約83万人に利用され育てられてきた観察の森ですが、震災から2年、本格的な復興に向けてスタートを切っています。

設置から半年間で5000人の利用があった「木育ひろばつつしし」の第二期増床スペースは4月上旬、美しい水草が見応えの屋内ヒオトープ「Faccino（ハコビオ）」は5月連休に登場予定です。また、「園長の里山ガイドツアー」や「父子の木工教室」など、時流にあったオリジナルプログラムも幅広く展開していきます。進化を続ける観察の森に今後ともご期待下さい。そしてどうぞ一緒に森づくりを行っていきましょう。



### 牛久市観光アヤマ園管理業務受託

プロジェクト責任者 坂 弘毅

牛久市観光アヤマ園の管理業務を受託してから早8年が経過しました。

8年前の状況は写真のようにハナシヨウブの株はほとんど無く、圃場の土も硬くアヤマ園としてはとても惨めな状態でした。

最初の行動は、佐原の水生物園とハナシヨウブの販売農家に栽培管理の手法を教わり、作業標準を作りました。それと同時に、アヤマ園の土壌の分析です。

牛久沼一帯は6000年前の縄文海進によって海水が入り込み、その塩分が未だに影響し、ハナシヨウブは育たない、という伝説めいた言い伝えが残っていました。

このため、茨城大学から土壌分析の測定器をお借りし、塩分濃度等の測定ならびに、水質の確認を行いましたがいずれも基準値以内、異常なしという結果が得ました。

管理業務はここからスタートです。まず最初に手を付けたのが、除草でしたが、採っても採ってもはかどらない雑草には閉口しました。気が遠くなるような広大な広さ、本場に管理が出来るのだろうかという、不安がよぎりました。

最初の一年は除草と圃場の整備に徹し、二年目に佐原から新しい株を購入し、植え付けは市内の市民団体「ゆめまちネット」の皆さんに協力を頂きました。そして、荒廃した圃場は復活し、この年は新たな株はきれいな花を付け、訪れる市民



の方々から安堵の声が上がりました。3年周期の株分けも地について管理業務も順調にいつていきましたが、7年目の昨年は、はじめて花の付きが悪く、楽しみに来園される方々にはご迷惑をかけるてしまいました。管理方法には従来と変わらず、原因はわかりませんが、圃場の地力が衰えて来たのかも知れませんが、このような状況から、いろいろな実験をスタートさせました。客土、株分けの仕方を変更等々、その結果がはじまっているようです。今年は昨年の汚名を挽回したいと思えます。



荒廃したアヤマ園 H17年6月 坂



### 身近な樹木

No.25  
フジ

マメ科フジ属の落葉つる性木本。茎は初め草質で生長が早く、長く伸びて樹木などに巻きつく。やがて木質化していき、年月とともに太く生長する。本州から

九州に分布し、市内では写真のように斜面や雑木林などに生育している。

寿命が長く、垂れ下がる花序の豪華さも好まれ、各地に天然記念物に指定された古木がある。園芸品種も出回っている。開花時期は4～5月で、藤色と呼ばれる美しい、濃淡のあるうす紫色をしている。長く垂れ下がる総状花序は20～90cm、写真の下のように蝶の形をした多数の花をつける。果実は細長く扁平で、長さ10～30cm、いわゆる豆果で、種子のママが入っている。ツルは非常に丈夫で、椅子や籠などの家具として利用される。

平安時代中期までは、ツルから繊維をとり衣服を編んでいた。「万葉集」などには「作業服」として詠まれている。葉は複葉で、長さ20～30cm、小葉は11～19枚、若葉は茹でて、あく抜きして食べられる。花は湯がいて、三杯酢やてんぷらで食せる。種子は食中毒や腹痛の薬などに利用される。フジは花の美しさだけでなく様々なところに利用され愛好されてきた。

(内田智子)



斜面林のクヌギに巻きつく開花期のフジと蝶花  
渡辺00.5.7/ 3.5.3

### スプリング・エフェメラル

スプリング・エフェメラル(Spring ephemeral)は、春先に花をつけ、夏まで葉をつけると、あとは地下で過ごす一連の草花の総称。春植物(はるしょくぶつ)ともいう。直訳すると「春の儂いもの」「春の短い命」というような意味で、「春の妖精」とも呼ばれる。

この春の妖精と呼ばれる花は、キンポウゲ科 キクザキイチゲ、ユキワリイチゲ、アズマイチゲ、イチリンソウ、ニリンソウなどのイチリンソウ属、フクジュソウ、セツブンソウ。ケシ科 エゾエンゴサク、ヤマエンゴサク、ムラサキケマン。ユリ科 カタクリ、ショウジョウバカマ、ヒロハノアマナ等 (出典 ウィキペディアフリー百科事典)



## 初夏の里山風景 牛久ではゴールデンウィークに家族総出で田植えが始まります。



代播きの頃 牛久市城中町の水田 2010/4/29 坂

## お知らせ

「会報さとやま」が今回から季刊となることに伴い、うしく里山の会の月間スケジュールは当会報には掲載しないことになりました。各プロジェクト責任者から活動予定をお聞きするか、うしく里山の会のホームページをご覧くださいと思います。 <http://ushiku-satoyama.org/>

平成25年度通常総会のお知らせ

平成25年5月19日（日）10:00～12:00 牛久自然観察の森ネイチャーセンターにて

後日総会議案書を郵送いたします。欠席される方は、委任状を提出していただきます。

総会の後、午後から結束町のクリーンアップ作戦を行います。皆様のご協力をお願いいたします。

今月発刊いたしました「牛久の里山樹木ハンドブック」を会員の皆様に無償で配布させていただきます。総会議案書郵送の際、引換券を同封いたしますので、観察の森でお受け取り下さい。

### 編集後記

うしく里山の会が創立から10周年を迎え本当におめでとございます。

「会報さとやま」はこれまでに10年間欠かさず発行を続け、前号で121号を迎えました。創刊当時は試行錯誤の連続で苦労が続きましたが、当時の会報を開いてみると、全てが新鮮で、楽しい思い出が凝縮されていました。

紙面の構成も何回か変更されました。創刊当時は味のあるクラフト紙を使った時期もありましたが、発行部数が増加するに伴い、経費の節減から複写機から印刷機に変わりました。毎月一回、牛久市社会福祉協議会ボランティア市民活動センターの印刷機をお借りし、印刷を行ってまいりました。

この間、編集に携わった多くの方々には敬意を表したいと思います。この度、10周年を記念して、会報さとやまの紙面ならびに、印刷方法を大きくリニューアルすることにいたしました。

マンネリを防止すること、誰もが読みやすい紙面にするので、NPO法人うしく里山の会の情報発信を加速させることが大きな目的となっております。

平成25年4月以降の会報里山は内容を充実させ、年四回の季刊とすることが理事会で決定されました。

今号は平成25年春号として発行させていただきます。今号よりカラー印刷で、皆さんから提出いただいた写真がカラーで楽しめることになりましたので、これまで以上に会報里山をお楽しみいただけます。

（坂 弘毅）

発行	特定非営利活動法人	うしく里山の会	300-1236茨城県牛久市田宮町808-20
TEL	029-873-8552	FAX 029-873-8552	<a href="http://ushiku-satoyama.org/">http://ushiku-satoyama.org/</a>
事務局	牛久自然観察の森内	TEL 029-874-6600	発行責任者 坂 弘毅